



グローバル・ノースの 矜持と責任

ヴェオリア・ジャパン会長

野田由美子

のだ ゆみこ

コ

コロナ禍の収束とともに海外に頻繁に行くようになり、衝撃を受けたのが、グローバル・サウスの台頭だ。ビジネスの場も国際会議も観光地も、アフリカ・インド・中東等からの人々であふれ、3年前とは様変わりの様相だ。2050年に人口約100億人に達する世界は、新しい成長のダイナミズムと熱量に満ちている。

過去30年間成長から取り残された日本は、この新たな世界でどう生きるべきか。成長は不可欠だが、グローバル・サウスと同じ土俵で競争することは、もはや日本の未来でも役割でもないだろう。プラネタリーバウンダリーが地球規模のサステナビリティの挑戦を突き付け、コロナ禍を経て人々が幸福(ウェルビーイング)とは何かを問い直した今、日本にはグローバル・ノースの代表として、新たな世界を拓く役割と責任がある。

その切り札こそが、経団連が掲げる、カーボンニュートラル実現に向けたグリーン・トランスフォーメーション(GX)、エネルギー・鉱物・水資源を循環させるサーキュラーエコノミー(CE)、ならびに生物多様

性・自然保護を促進するネイチャーポジティブ(NP)の三位一体推進にほかならない。大量生産大量消費モデルを超え、地球と共生する持続可能な経済社会を実現し、成長と持続性の両立を世界に示すことが、我が国が果たすべき使命ではないだろうか。

日本にはその基盤がある。世界でも有数の技術力とものづくり力は言うまでもない。宮崎駿監督の映画「もののけ姫」に象徴されるアニミズム的な自然との共生観や、ノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マタ伊氏が賞賛した「もったいない」精神が我々には根付いている。

20世紀、米国は、コカ・コーラ、リーバイス、マクドナルドに象徴される文化と経済社会モデルを広め、世界が憧れる存在となった。未曾有のチャレンジを抱える21世紀、GX・CE・NPの一体推進で未来を先導できれば、日本は世界に輝く存在となり得る。それには確固たる哲学とイノベーションが不可欠であり、その先頭に立つのは私たち経営者にほかならない。会員の皆さまのご指導をいただきながら、少しでも日本と世界の未来に貢献できるように尽力したい。